

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について ～育ちと学びをつなぐ～

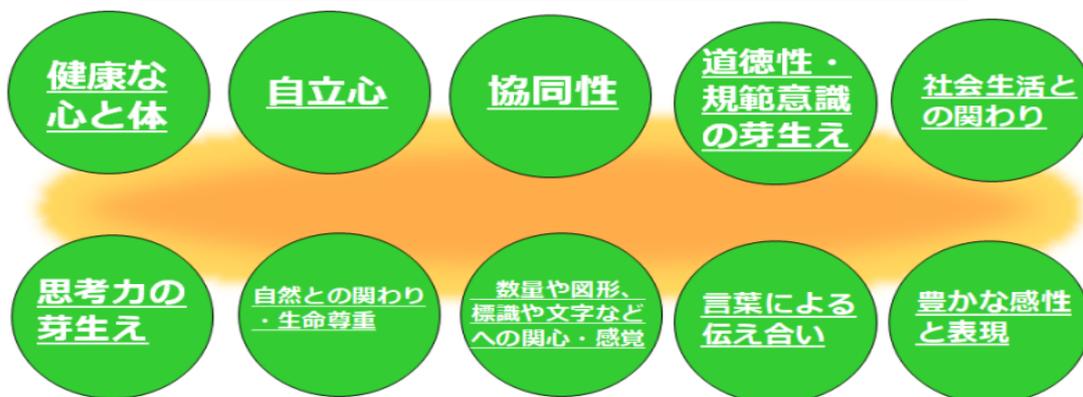
秋田県教育庁幼保推進課

※保育参観の前や各研修会の際にご活用ください。

小学校教育との接続の一層の強化を図るため、乳幼児期の教育・保育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校等の教職員と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして子どもの姿を共有するなど連携し、就学前教育・保育と小学校教育との円滑な接続を図る。

(参考:「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」)

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは



- 5領域のねらい及び内容に基づいて、幼稚園・保育所・認定こども園等で、乳幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、就学前教育・保育において育みたい資質・能力が育まれている子どもの具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿である。
- 保育者は、遊びの中で子どもが発達していく姿を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて捉え、子ども一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくらり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮することが求められる。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある。子どもの自発的な活動としての遊びを通して、子ども一人一人の発達の特性に応じて、これらの姿が育っていくものであり、全ての子どもに同じように見られるものではない。
- 5歳児に突然見られるようになるものではないため、5歳児だけでなく、それぞれの時期から、子どもが発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要がある。



「持続可能な社会の創り手となることができる力の基礎」を育み、「主体的・対話的で深い学びの実現」のために、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をどのように活用していったらよいのでしょうか。事例を通して活用の仕方を考えていきましょう。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用した保育参観後の協議(例)

<事例> 「温泉を作ろう！」 5歳児（8月）

3人の子どもたちが砂場に穴を掘って遊んでいる。一人の子どもが、家族で温泉に行った経験から「穴に水をためて、温泉にしたい!」と言い始めた。「それいいね!」と賛同した子どもは「迷路のように水を流してためよう」と言う。周りを見渡し、近くにあった樋を持ってきて水を流してみる。しかし、傾斜がないのでうまく流れない。困った子どもたちは「高いところから流してみたらどうかな?」と砂で山を作り始めた。できた砂山の上に樋を置いて、そこから水を流してみるとうまく流れ出した。しかし、掘った穴にすぐに水が流れ出てしまうことが不満だったようで、「もっと長く流してみたい」と数本の樋をつなげようとし始めた。最初の樋はよいが、2本目からは平坦な場所に置いていたため、水はうまく流れていかない。すると、一人の子どもがビールケースを持ってきて、「ここに置いてみたらどうかな?」と、樋のつなぎ目の下に置いた。すると、子どもたちがイメージしたように水が流れるようになった。「流れた流れた!おもしろいなあ!」と目を合わせながらうれしそうにしていた。

しかし、何度も水を流しているうちに樋がずれてしまい、そこから水があふれ出るようになってしまった。その状況を見ていた保育者が「なかなかうまくいかないね。どうしたらいいかなあ」とつぶやくと、「ケースの上に砂置いてみる?」「でも、この穴から砂が出ちゃうかもしれないよ」「そうだ!ビニールを敷いてからその上に砂を置いてみよう」と、樋がずれないように、ビールケースの上に何かを置いてみたらどうかと相談し始めた。保育者は子どもたちだけで解決に向かっていると感じ、じっくりと見守っている。相談後、ビールケースの上にビニールシートを敷き、その上に砂を置いてみた。しかし、数回流してみると、水とともに砂も流れ出し、また樋が外れてしまった。一人の子どもがビールケースの穴に何かを挿して樋を固定すれば動かないのではないかと周りを見渡していると、他の子どもが円管を見付けてきた。「2つ入れてみたら?」という友達言葉の聞いて、樋を挟むようにして2本の円管を挿してみると、水を流しても動かなくなった。「やったね、うまく流れるぞ!」子どもたちはビールケースや塩ビ管、ビニールシートを組み合わせ、水がスムーズに流れるように協力しながら置き方や角度を調整していた。うまく流れそうなことを確認すると、「じゃあ、水流すよ!」と一番上からゆっくりと水を流した。水は樋から樋へと流れていき、砂場の真ん中に掘っていた穴にはどんどん水がたまっていった。子どもたちは「よし、つながった!」と喜び合った。



この事例を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに読み解くとどのような育ちが見られるのでしょうか。

前述したように、「到達目標ではない」ということ、「個別に取り出して指導すべきものではない」ということ、「一人一人の発達特性に応じて育っていくもの」ということを念頭に置くことが大切です。そして、「遊びを通してどのような経験をしているのか」「どのような力が育とうとしているのか」について語り合いを進めていくことが大切です。



<保育参観後の協議にて>

どうしたら水が流れるのかを一人一人が考えて、「高さや角度を変えてみる」「樋が動かないように工夫してみる」など、様々な方法で試行錯誤していました。また、繰り返し試していく中で、水と砂の関係性に気付いたり、水の量や流し方によって流れる速さが変わっていくということを感じ取ったりしていました。自己発揮しながら遊ぶことによってたくさんの気付きがあり、気付いたことでより思考が深まっていったように思います。友達の考えやアイデアに触れることでも、違う考えがあることを知り、もっといいやり方を考えている子どもの姿を見ることができました。

→ 思考力の芽生え



保育者

「穴を掘って温泉にしたい」「迷路のようにして水をためよう」「砂を置いてみる？」など、自分の思いや考え、それを実現するための方法を互いに伝え合っている場面が見られました。共通の目的が明確になっていたことで、対話の必要性が生まれ、友達と一緒に自己を発揮しながら活動する姿に結び付いていたように感じました。上手に流れた場面では、「よし、つながった!」とみんなで喜び合う姿が見られ、達成感や満足感、充実感を味わっていたと思います。担任の先生はその姿を見逃さず、一人一人の遊びの過程を認めて伝えるだけでなく、「友達と一緒にだったからできたこと」を価値付けしていたのがよかったと思います。次の遊びの意欲にもつながると思いましたが、「学びに向かう力」を垣間見ることができた一場面だったように感じました。

→ 協同性



小学校教員

「水を流して、温泉を作りたい」という共通の目的に向かい、試行錯誤しながら挑戦している姿が印象的でした。ビールケースの上に砂を置いてもすぐに落ちてしまっ、樋がずれないようにすることの難しさを感じていましたが、失敗しながらも最後までやり遂げようとする前向きな思いを子どもの姿から感じることができました。友達と力を合わせて活動したことも達成することができた要因の一つだと思いますが、これまでの遊びの経験から、「やってみるとうまくできそうだ」と、自信をもって活動していたことも、主体的な遊びにつながっていったと感じます。子どもの思いが実現できるような環境が構成されていたり、保育者が一人一人の状況を見取って言葉掛けしたりしていたことも、粘り強く挑戦できるきっかけになっていたと思います。

→ 自立心



保育者

今回は上記のように「思考力の芽生え」、「協同性」、「自立心」について語り合いが進められましたが、他の姿につながる育ちも必ず見えてくるはずです。子どもの具体的な姿を起点に語り合いを進めていくことで、「保育の質の向上」「授業改善」へとつながっていきます。

